

GREEN Sketch

AUTUMN 1997

No. 2



新潟ふるさと村

C O N T E N T S

- INTERVIEN~ハーブが人と人とのネットワークの架け橋に
- 緑花イベント情報
- 職員紹介
- 植物に親しむ
- 公園紹介
- 特集 小出郷文化会館
- 緑花事例紹介
- 緑の愛護団体紹介



(財)新潟県都市緑花センター

ハーブが人と人とのネットワークの架け橋に

インタビュー

長岡・古志の里ファームハーブガーデン 恩田さんにインタビュー

ハーブという分野で緑花の普及に尽力されている、古志の里ファーム

ハーブガーデンの恩田吉和さんにお話をうかがいました。

——いつからハーブを始めたのですか。

恩田 今がこれの本業なんですけど、ハーブにたどり着くまでには、二転三転してきました。米作り、きのこ作りを経て、趣味でハーブを始めるようになったのが十年前。

当時、技術書があまりなかったから、先進の他県へ足を伸ばして情報を得たりして。最初は育ててみて上手くいくものもあるし、枯らしてしまうものもあるし、それを繰り返しながらノウハウを見つけてきたんです。そして、五年前に一大決心して、これを生業にしていこうと。

「もっといろんな人に広げたい」

——ミント倶楽部という会を作ったらしいんですが、きっかけは、やはり、恩田さんが声をかけて？

恩田 そうそう。最初、趣味の部分が五年ぐらいあって、その後、営業するようになって五年ですが、その頃、集まってハーブを楽し

む会をやりましょうってことで。

現在、ミント倶楽部の会員の方は五百人くらいで、そのうち九十九％が女性です。

——ミント通信というものを出版してらっしゃいますよね。

恩田 手書きですけどね。三ヶ月に一回くらい出してるんですけど、県内まんべんなく、六百人くらいの読者の方がいらっしやるんです。時期になると、ねじりはち巻きでやるんです。ちよつと気張っちゃって、自分の主張を入れようかな、と思って。

最近、あちこちで、「ハーブが流行りですね」って言われてますけど、「流行りじゃ困るんだよねー」という発想で、定着させるためには何ができるかと思って、若干こだわった表現なんかも使ったりしてますけどね。

また、マニアの方だけでなく、もっと幅広いいろんな人に付き合ってもらうにはどうしたらいいか、私なりのメッセージを載せています。

あとは、ここで、月に二〜三回ぐらいハーブを楽しむイベントをやっていますが、それが、広がるきっかけになれば、と思っています。



—— イベントにはどんな方が参加されてるのですか。

恩田 ミント倶楽部と同様に参加者の方も圧倒的に女性の方が多いです。

以前は四十〜六十代の人が多かったけれども、最近は、高校生から二十代の人が増えてきましたよね。そういう点ではずつと広がりが出てきましたように思います。

また最近では、出張講習を要請されることも多く、昼ここで仕事をしてから、夜は公民館主催のイベントに呼ばれたりするんですよ。

私が植物中心で、女房はフラワーアレンジ等の手工芸の分野という分担です。

—— 手工芸の方は、あちらで、販売されてるんですか？

恩田 展示兼販売所ということで。全部彼女



奥様のかわいい手作り品が販売されているラベンダーハウス。
ちなみに奥様とのなれそめは？
「全然ハーブと関係なくて、絵になるような話はないんです」（笑）



恩田吉和さん

学校卒業後、Uターンで農業を始める。
米作り、きのこ作りを経て、ハーブの分野へ。
現在、奥様と二人で古志の里ファームハーブガーデンを経営。

が作ってるんです。

—— リース作りやフラワーアレンジはどなたかに教わったことがあるんですか？

恩田 全然ないんですよ。一から自分たちで独学で。

季節になれば、山にアケビや藤のつるを取りに行つて作つてみたり、野の花やドライフラワーになるものを探してきたりとかして、ハーブの葉や花と組み合わせることを始めたんです。ドライフラワーになるもので栽培できるものはうちで栽培しています。

「他の分野にも

ハーブを生かせたら」

—— 今ではハーブの知名度も高くなりましたが、始めた頃は、まだ今ほど、知ってる方もいらつしやらなかったんじゃないですか。

恩田 そうですね。ほんとのハーブのマニアの人しか知らないくらいでしたので。そういう人達とのつながりも、まだ結構あるんですよ。

INTERVIEW

そういう人達は、自分自身でもいろいろ試行錯誤しながらやってみようという人が多いから情報交換をして、お互い切磋琢磨しているという関係になってますね。

——育てるほうのネットワークだったんですね。

恩田 そう、最初はね。途中から利用する方達との付き合いが出てきて。イタリア料理のシェフとか、それから、別の道の陶芸家や造形作家、フラワーアレンジの先生だとか、他のプロの人達との付き合いの中でそういう分野にハーブを生かせないかと。

例えば、シェフの方達には、料理でのハーブの使い方を聞かせてもらったりして。初めての人に、こうするといんだよ、なんて受け売りしてみたり。(笑)

また、シェフの方にも、食材としてのハーブを育てながら料理に使ってもらえば、新鮮さもあるし、またそれを、お客さんに話せば店の魅力アップにもなるし、なんて話をしながらいいお付き合いも始まっています。

——人と人とのネットワークが恩田さんの周りでは、しっかりとある感じがします。ハーブを育てていて、ご苦労も多いのではないですか。

恩田 そうですね。楽しいだけじゃないんですよ。しっかりとそれを仕事として展開しようとなると、表に見えない部分を自分の作業として組んでないと。一般の人には華やかな部分しか見えないんだけど。「いいですよ



ミントティーと自家製ブルーベリー。
ティーカップは知り合いの陶芸家の作品。

そんな仕事ができ、なんて言われるんだけど、表に出る前の下準備のほうに、「圧倒的に時間を費やしていかなければいけないんですよ。

「消費者との直接のふれあいを大切に」

——どんな所に出荷しているのですか。

恩田 農協関係が多いんです。園芸店とかホームセンターには出していない。新潟の生産者でそういう所に出しているところはないんです。

うちも、何回かそういう所を持っていこうかと思っただけで、完全に商品だけの発送になって、利用法等の点で購入者との情報交換が完全に絶たれるじゃないですか。俗っぽい言い方すれば、五掛、六掛で卸し

て、向こうがその時々他段を付けて売ってあげてますよ。そして、結構余って捨てられたりしてさ。そういうのを見たり聞いたりしてると、こっちが汗拭って必死に苗を作っても、出荷すれば終わり、あとはどうなるかわからん、というのが果していいのかな、というかね。その点で二の足踏んで、あまり大量に作る方向には動かないんですけどね。



ハーブ畑。この他にハウスでも栽培している。小売りもしていて、初心者のお客様が圧倒的に多いとか。



——ただハーブを売って普及させるというやり方ではなくて、地道ながらも、本当の意味で皆さんに浸透させるのが、今現在、恩田さんの目標としていることなのです。

恩田 ハーブの栽培法や総論を話を聞いてもらって、イメージを持ってもらう、そこまでするのを知ってもらってから、植物を育ててもらいたいんです。

「流行りで終わらせたくない」

——今後、人に手伝ってもらって、もっと事業を拡大するおつもりですか。

恩田 選択肢としてはありますけどね。この先どう動いていこうかという見極めも大事ですよ。さっき言った、「流行りで終わらせたくない」というのもあるでしょ。もっと地に着いた形で楽しむ方達、暮らしに根づいたハーブ作りを楽しむ方達が増えれば、私達も次の展開に進んでいくだろうけれども、慎重な部分もありますよね。一過性で終わってしまうんじゃないかという危惧も若干あります。

——皆さんのなかに根づくまでは、地道にやっけていくということですね。

恩田 毎年新しい試みをしたり、情報発信をしながら、いろいろな企画を作ったり、いろんな新しい人達とのつながり、ネットワークを広げながら、私なりの確信みたいなものを積み重ねて、次へのステップとして、大きくしていけることがあるのかな、と思ってますけど。「こうしてやるう」というすごい意気込みはないんですよ。

意気込みはな

いと謙遜しながらも、熱っぽく語る恩田さん。ハーブを通して人とのつながりを広げながら、緑と花を普及させる形もあるのです。



植物に親しむ

「シクラメン」

冬の室内を温かく演出する鉢物の王様シクラメン。上手に管理して、長い間楽しんでみましょう。



シクラメンとは

サクラソウ科シクラメン属の球根植物。原産地は地中海沿岸。名前の由来は、ギリシャ語のキクロス（丸い意）より命名されたものです。現在の園芸品種は、シクラメン・ペルシカムという原種から作られたもので、日本に導入されたのは、明治の初めだと言われています。

花言葉…「遠慮、嫉妬」

購入のポイント

- ・花梗（花の茎）が太く、株の中心に、10輪前後揃っている。
- ・葉は固くしまり大きさがそろって色が濃く、葉数が多い。
- ・鉢土の上に球根が顔を出している。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
開花期	[Blue bar from 1 to 5]											
水やり	[Blue bar from 1 to 5]											
害虫	[Blue bar from 3 to 12] ハダニ、アブラムシ、オンシツコナジラミなど											
肥料	[Blue bar from 1 to 5] 2週間に1回程度											
植替え	[Blue bar from 9 to 10]											
置き場所	[Blue bar from 1 to 6] 日当たりのよい窓辺など											
	[Blue bar from 7 to 12] 半日陰											

管理の仕方

置き場所

葉が黄色くなったり、花の立ち上がりが悪くなる原因の多くは光線不足です。昼は日の当たる窓辺に置き、日光浴をさせます。温度は20℃を上限に最低温度は5℃は維持するようにします。暖房の風が直接当たる場所は避けましょう。

水やり

鉢土が乾いたら、葉や球根にかからないようにして、鉢底から流れ出るまで水やりをします。受け皿にたまった水は捨てます。



病気

花にしみがついたり、株の中にボワツとした毛のようなものが生えていたら、灰色かび病の可能性があります。その部分を取り除き、ベルミノ水和剤の1000倍液を散布します。しかし、室内鑑賞用植物への薬剤散布はあまり好ましくないので、まめにチェックをし、予防に努めましょう。

肥料

通常は購入してから1ヵ月くらいは必要ないでしょう。それ以降は市販の液体肥料の1000倍液を、2週間に1回程度与えます。

花がら摘み

咲き終わった花や傷んだ葉は、病気発生の原因になるので、茎を持ってねじりよう抜き取ります。

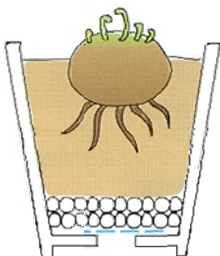


休眠

5〜6月、花が終わった頃から水やりの回数を減らします。葉が出なくなり、芽が動かなくなったら水やりをやめます。そのまま、半日陰の風通しのよい場所に置いて、夏を越します。

植え替え

9月に入ったら植え替えをおこないます。古い根や枯れた根は切り取り、球根上部を土の上に出して植えつけます。



四季の響と出会いの郷

人と文化と公園と



「僕も指揮者」

本当に良いものを鑑賞するだけでなく参加し体験する（羽田健太郎ヤングビープル・コンサートより）



緑豊かな奥只見レクリエーション都市公園（小出地域）内に平成八年六月にオープンした「小出郷文化会館」。住民が会館建設前から行政に参加して創り上げたホールとして、また、柿落とし（こけらおとし）も住民自ら舞台上に立ったことで話題を呼びました。

二町四村（小出町・堀之内町・入広瀬村・守門村・広神村・湯之谷村）の広域圏の住民のホールとして、魅力的な事業を次々と催す会館の館長に就いていらっしゃるのは、地元工務店の専務・ミュージシャン・消防団長等々様々な顔を持つ桜井利幸（さくらいとしゆき）さんです。その桜井さんに、文化会館館長としてお話をうかがいました。（文中敬称略）

「人が集う文化の郷」

——このホールの目的はどのようなものでしょうか。

桜井 このホールは新潟県の奥只見レクリエーション都市公園の素晴らしい自然と緑のある公園の中にあり、また、運良く文化会館の横には高速道路のインターチェンジがあつて、東京からも新幹線で一時間少々、高速でも近く、外からのアーティストも来やすい条件なわけです。ホール建設計画の段階で「住民による文化を育む会」という良いホール造りのための会ができたのですが、そこから皆で論議を重ねて決めたテーマとコンセプトがあります。まず、テーマとして「四季の響（おと）と出会いの郷（さと）」があり、さらにその中に①ホールが文化の核施設になること、②その文化を核として地域の方だけでなく首都圏の方や世界の方々の交流を行っていくこと、③これが今回ホールを創るにあたって声が多かったのですが子供たちの感性を磨く場を与えること、④熟年世代や高齢者の方たちが生き生きと挑戦して楽しめ

るような場としていきたい、という四つのコンセプトがあり、それに基づいて事業を展開しているのです。

「文化という花を育む」

——具体的にはどのようなことを行っていますか。

桜井 今、私達の一番の目玉が、羽田健太郎さん（音楽家）による「ヤング・ビープル・コンサート」です。以前、羽田さんが「アメリカでパーンスタインが子供達を集めて音楽を教えていたように、自分もこれからのライフスタイルにしたい」という本がありまして、それで、もし羽田さんがそういうプログラムを考えているなら、とお話を向こうにしましたところ、事務所の方からは是非やりましょう、と飛びついていただきました。昨年第一回目が実現したわけです。クラシック、という結構難しいそうで畏まってしまいましたが、昼間この辺一帯の小学校五年生を招いて、たくさんトークや、子供達をステージにあげて指揮をさせたりとか、楽器ひとつひとつの紹介などを交えて音楽の楽しさを教えていた



●ご利用のお問い合わせ●

新潟県北魚沼郡小出町大字干満1848-1
TEL.02579-2-8811
FAX.02579-2-6776



きました。夜には大人向けに少しプログラムを変えて演奏してもらいました。子供達は感動して、聴いた音楽の中でもこれは良かった、この楽器は良かったと、ひとりひとりの子供に何か心をうつものがあつたようです。

——ホールというと、皆さんに観せたり聴かせたりという感じなのですが、それだけでなく参加してもらおうのですね。

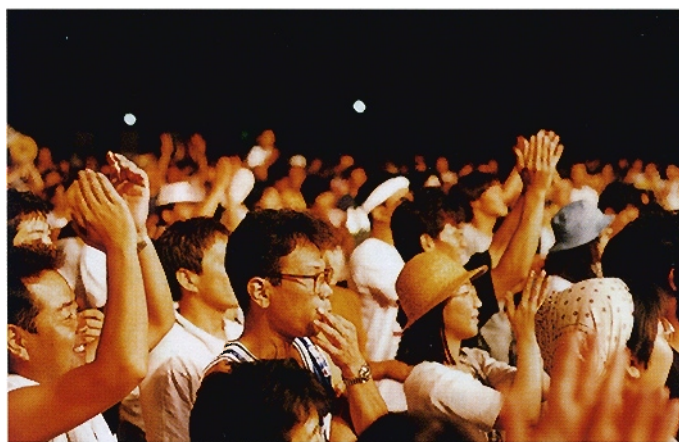
桜井 そうですね。観て聴いて参加して、それから自分たちで発表して、さらに創造していく、そしてそれに磨きをかけてどこでももっていける一流のものにする、というようにつくりあげられればなあという考えを持っています。今はまだ鑑賞することと、学ぶこととの段階ですが、いつも気持ちの中に感動や感性があれば、いずれは創造することも出てくると思います。

小幡 (小出広域事務組合広域圏振興室長 小幡誠さん) 緑化に例えると、土を作って、種を蒔いて、水をやって…と花作りにも似ていますね。文化を育てるということは段階を経てやっていくことだと、館長は一生懸命種を蒔いているわけです。

桜井 まあ、二年目ですけど。あんまりいっぱい種を蒔くものだから、管理する親方の室長(小幡さん)があれにもこれにも水や肥料をやらねばならん、と苦労して…。(笑)

「四季の響に集う」

桜井 テーマは文化会館だけでなく広い公園を含めた「四季の響と出合いの郷」ですから、



「夏の夜の祭り」
魚沼の空の下、音楽の響きと感動に人々が集まって(上々颱風コンサート)

この環境を生かしたイベントをやっているとは思っています。野外ステージ「雪のコロシム」があるのですから、大きな、夏の夜に地域の方が集まってお祭り騒ぎをするようなものを、私だけでなく地域のみんながやりたいと思っています。斑尾高原のジャズコンサートのような、若い人がリーダーシップをとって開くイベントが最近不景気のため少ないですから、それを育てる意味でもこの時期にはここで大きなイベント・お祭りがあるんだよ、と定着させていくことが大切だと思います。

先日は日野皓正さんがドリンク付きのコンサートをしたのですけれど、この野外で何かしたいねとおっしゃっていました。小出町が冬の国際雪合戦の会場をこちらに持つてくるという方向ですし、東京のテレビ局の方がこのロケーションを気に入っていただいで面白いことをしたい、というお話も来ています。

また、イベントだけでなく、簡易宿泊施設等を設置できれば、バンドや部活で合宿をして、ホールと野外ステージで活動できます。ですから、この恵まれた環境を生かして、様々な可能性とうまく手を携えて企画をし、実現できたらいいと思います。

「花の咲く日を夢見て」

桜井 環境的としては恵まれた自然環境の中に公園と文化会館があつて、人的には企画運営委員会・裏方を応援してくれるステーションスタッフ(現在登録七十二名)・財政的に支援してくれるサポーターズクラブ(法人・個人)・ホールの愛好会的な友の会(年会費二千元)と、それが今ホールを取り開んで構成している形です。ですから、行政と民間が一緒に噛み合せて活動しているわけです。建設当初から現在まで住民が行政に参加してああでもないこうでもない色々やっているケースとしては非常に珍しいのではないのでしょうか。今官民一体と言われていますが、そういう意味で良い形で進んでいると思います。

※このお話は、平成9年6月24日小出郷文化会館で伺ったものを事務局でまとめました。
(文責 事務局)

後記

お話しを伺っている時、ホールについて活き活きと語る館長の表情がとても印象的で、文化創造に対する前向きな力を感じました。

今後、奥レクの完成に伴い、公園を利用した文化の発展の可能性を期待できます。(T・O)